

Artisanship（職人氣質）にみる「真の豊かさ」

神藤 浩明

安倍首相が9月の党総裁再選と同時発表したアベノミクスの第2ステージ「新しい3本の矢」の評価が分かれている。個人的に特に気になるのは、「戦後最大の経済、戦後最大の国民生活の豊かさ」を標榜し、第1の矢「希望を生み出す強い経済」の象徴として、名目GDP 600兆円達成の目標を掲げていることである。名目3%以上の成長率を続けると2020年度には実現される計算になるが、その可能性云々の話だけではない。そもそも成熟社会に移行して久しい我が国において、GDPの拡大が国民生活の豊かさに直結するのであろうか。

名古屋大学経済学部で長らく教鞭をとられた故飯田経夫教授が、1980年6月から1984年3月までの約4年の間に世に問うた「豊かさ三部作」（『「豊かさ」とは何か—現代社会の視点』『「ゆとり」とは何か—成熟社会を生きる』『「豊かさ」のあとに—幸せとは何か』、いずれも講談社現代新書）は、時代背景は変われど、今なお鋭い示唆に富む。「ワーク・ライフ・バランス」や「地方創生」が喧伝される現代と、新たな「ライフスタイル」や「地方の時代」を模索し始めていた当時との間で、「真の豊かさ」を求める姿に本質的な違いはないからだ。今も昔も「豊かさ=成長」の呪縛に捕らわれ、それに代わる価値観を見い出せずにいることに変わりはないようである。

マスコミの論調とは一線を画し、「既に日本は十分豊かだ」と実感していた飯田先生の目には、高度成長を経て「失業と飢えの恐怖」から解放された日本人が「物質的な豊かさ」をもてあまし、みせかけの「ゆとり」に潜む我が国経済の綻びの兆しが、政府の肥大化につながる「たかり」と「悪乗り」、そしてモノづくりのメッカである名古屋からの視点らしく、「職人根性」のかげりとして表面化しつつあると映った。30年以上が経過した今、世界最大の公的債務残高を抱え、円安下でも輸出が増えにくい貿易構造になりつつある姿は、飯田先生の言葉を借りれば、「足るを知らず、小人閑居して不善をなした」結果といわれても反論の余地はなからう。

東京大学の大龍雅之教授によれば、人間の生き様として、利潤を最大化し仕事の質を二義的に考える Capitalist と、仕事の質をそれに係る労苦を勘案しながら最大化する Artisan のいずれかしか選べない場合、進化論的ゲームの枠組みで双方の効用を比較すると、後者のタイプから成る社会の方がパレート優越的になるという。Artisan を重んじる社会にこそ、消失しつつある職業の多様化の重要性と、手を抜かず、手間暇をかけて仕事の質を迫及することから得られる充足感が再認識できるのではないかとの問題提起である。それこそが「心（=真）の豊かさ」にもつながる。更に、飯田先生はこうも綴った。「良質の日本人が世界の要所要所で汗水流して働き、その地に貢献することを通じて、日本への好意と信頼を築き上げること——いいかえれば、「世界の職工」または「世界のオペレーター」になることが、日本の「総合安全保障」の重要な一環である」。